

トーマス・マン

——その生涯と作品——

文学とは常に自己を探究し、自己を語るものであるかも知れない。しかし、常に自己を探究し続け、自己を語り続けながら、しかもその際、トーマス・マンのように、「時代の声を聞くためには、自分自身の声に耳を傾ければよかった」と語るだけの自信を持ち得た作家は珍しいのではないだろうか。「時代を代表する」という言葉がしばしばかなり安易に用いられるが、作家や思想家が一つの時代を代表するとは、もしそれが安易に時流に迎合すること、または流行の先端に立つことを意味するべきでないとするれば、一つの時代に含まれたさまざまな問題や葛藤や矛盾を自己の中に常に生き生きと感じ続け、それをあくまで誠実に追求し、表現して行くことで

青木 順三

なければならぬだろう。トーマス・マンの生涯と作品とは、そして彼の思想的発展の過程は、まさにこの意味で、一八七五年から一九五五年までの、彼が生きた時代を代表するものだったといえるのである。

一 『ブッデンブロック家の人々』

マンが自己を語った最初の構成的作品は、『ブッデンブロック家の人々』(一九〇一)である。もちろんそれ以前にも、それぞれ魅力のあるいくつかの習作的短篇などがある。しかし、この頃までのトーマス・マンは、何といってもまだ未知数の新進作家にすぎず、彼自身、自分の文学の進むべき方向を模索していた時期だったといえ

る。しかし、二年半余りの歳月を費して、彼が二十五歳の時に完成したこの長篇小説は、単に世の好評を博して、この若い作者を最初の驚くべき成功の渦に巻き込み、彼の文名を確立したという意味ばかりでなく、テーマにおいて、問題意識において、その他あらゆる意味で、マンの芸術家としての出発点を形作るものであった。

『一家族の没落』という副題を持つこの作品は、ハンザ同盟の都市リュールベックで百年以上も続いた素封家、穀物問屋を経営する「マン家」、すなわちトーマス・マンの家そのものの興隆と没落との経過をほとんどそのまま克明に記録した小説であって、マンはまずここで自分の家系上の由来——それは同時に彼の精神的芸術的由来でもあった——をみごとに描き出したのである。

一八三五年十月のある日、リュールベックで穀物商會を営むブッデンブローク家が、新らしく買入れたメンゲ街の豪壯な社屋に、一族が集って祝宴を開く場面からこの小説は始まる。(このメンゲ街の邸は、トーマス・マンが幸福な幼年時代を送った實在の家そのものであり、現在では「ブッデンブロークの家」として観光客を集め

ている)。この商會を築き上げた初代の老ヨハン(トーマス・マンの曾祖父がモデル)は、十八世紀的な風格と力強い生活力とを持った啓蒙主義者であり、健康な男らしい人物である。その次男で店の当主、領事^{コンスル}ヨハン・ブッデンブローク(マンの祖父がモデル)は、商會の事業を推進して行く意志においては初代に劣らないが、すでに初代のように独立自尊の生活を自信をもって押し進めて行くような健康な活力を失い始めており、敬虔な妻の影響もあって、信仰の中に自分の存在の支えを求めるようなどころもある人物である。初代の死後、彼は三代目の長男トーマス(いうまでもなく、トーマス・マンの父親に当たる)と共に商會の経営にあたる。このトーマス・ブッデンブロークは小説の事実上の主人公で、一族中もっとも洗練された人物であり、市参事會員、副市長になるなど政治的な表だった面ではもっとも成功を収める。しかしながら彼の内面にははつきりと没落の兆があらって、事業家としての弱さが目立っている。初代に体现された健康な市民性が徐々に退化し、弱められて行く過程は、しかし同時に、精神的芸術的に洗練され繊細化して行く過程でもある。それは彼が神経質で芸術家的な氣

質を持った美人のゲルダを妻にしたことにも現われている。(マンは「人生をまじめに営む気質」を父から受け継ぎ、母からは芸術的感覚と性向を受け継いだ、とみずから述べているが、この点に関しても、小説とモデルとの間にはかなりの一致が見られる)。

さて、トーマス・ブッデンブロークは、商会の当主としての責任感から、必死にその事業を維持し、伝統を保つ努力を続けるが、強く逞しい祖先の活力は彼の内部ではすでに消えかかっている。さらにトーマスの弟クリスチャンに至っては、市民的能力をまったく持たぬ「道化者」であり、一種の神経症に悩まされながら無為に日を送っている。しかも、彼は兄とは表面的には異質に見えるながら、本質的にはむしろ同質な没落現象を体現しているのであって、彼はいわば退化した市民としての芸術家のカリカチュアとして描かれているのである。そして四代目のハノオ。彼はもはや肉体的にも精神的にもただ過敏なばかりであって、生活力は完全に失われている。僅かに母親ゆずりの音楽の世界に自分の世界を見出すことができるだけで、彼が一家の後継者としてまったく不適であることは誰の目にも明かである。こうして将来に幻

滅したトーマスは、ある日偶然手にしたシュールパンハワールの著書『意志と表象としての世界』に述べられているベシミズムの世界観に深い共鳴を感じる。やがて一八七五年トーマスが路上で卒中に倒れると、遺言によって商會は解散され、未亡人ゲルダと共に小さな家に移り住んだハノオも十五歳でチフスにたおれ、この家系は絶えてしまうのである。ハノオ少年の死を悼む女達の悲しみのうちにこの小説は終わっている。

すでに述べたように、マンはこの長篇小説において、自分の生家の四代にわたる歴史を克明に記録したのであった。マン自身、父の死後家業の解散を体験したのであり、十五歳で夭逝するハノオは、シュールペンハワールのベシミズムの哲学に深く共感し、浪漫的な死の世界への傾斜を心に抱いていた当時のトーマス・マンの、かくもありえたかも知れない姿であった。だが、この作品は単にそうしたモデル小説にとどまりはしなかった。それは頽廢に向かう市民社会のうちにあって、個別化のために、感受性の増大のために、生理的な逞しさが失われて行く過程、いわばヨーロッパ市民一般の精神史を示してもいいのである。この小説がドイツの一小都市を舞台にしな

がら、全ヨーロッパの読者がそれぞれに自分のこととして読んだのはそのためであつたろう。さらにこの作品は、さきに述べたように、マンの芸術家としての出発点であつた。

「この大部な著書の全巻を通じて、わたしは今後の製作にあつてその上に足を据えることができるような、人間的芸術的な基礎を創造しておいた。わたしはいわばヴァイオリンの響体を作っておいた——今後それで演奏をなしうるような、その良質な木がいつも絃とともに震動してよい響きを出すような、その響胴がわたしの演奏にゆたかな反響を与えるような——」

マンはみづからこのように書き、そして「この大小説という自家製の楽器で演奏したリート」が『トニオ・クレーガー』である、と述べている。この美しい比喻に倣つていえば、『トニオ』と同時に書かれた『トリスタン』(〇三)は、このヴァイオリンによってマンが奏でた諸^{スケルツ}曲である、といつてもよいかも知れない。

この作品の主人公シュビネル氏は、トニオと同様に作家である。しかし、生き残つたハノオ、作家として生長を続けたハノオともいふべきトニオが、作者自身の面影を如実にとどめており、作品全体に溢れる音楽的雰囲気

と流れるような文体の魅力もあつて、この短篇がマンの「青春の書」として、若い人々の愛読書となつてゐるのに対して、一方の『トリスタン』は、ほとんど同一のテーマを同一の図式において扱いながら、主人公を見つめる作者の視角はがらりと変つてゐる。そこにはアイロニカルな距離が、諷刺的な批判がある。マンの芸術的資質としてその生涯のすべての作品を貫いてゐるアイロニーが、そしてアイロニーとは本質的には常に自己自身に対するアイロニーであることが、——マン自身の言葉でいえば、アイロニーとは「精神が生のために自己を否定すること」であることが——ここに早くもはっきりと読みとれるのである。ところで、作家シュビネル氏は、「實用向きの、市民的な、無味乾燥な伝統を持った一族が、もう滅びようとする間際になつてから、もう一度芸術によって浄化される例は稀ではない」という、いわば固定観念を持つてゐるが、これは初期のトーマス・マン自身が、心に抱いてゐた図式でもあつた。それは、一方は生き生きと健康で幸福で、平凡な愛すべき市民の世界、そして他方は認識と精神の世界、死への親近感を内部に秘め、健康な生の世界とは異質な、何かまともでない人間

としての芸術家の世界、という対立概念を基礎にしたものである。しかし、アイロニーをこめてこの固定概念を客観化し得た時、マンはすでにそのような觀念に単に無意識的に耽溺していたのではなかった。のみならず、『トニオ・クレイガー』の最後の章にあるように、トニオは（そして作者のマンもまた）平凡な健康な市民への、生の世界への「憧憬と憂鬱な羨望が宿り、ほんのわずかな輕蔑感と淨らかな全き至福とを秘めた愛」、「よき愛、実り多き愛」を肯定し、たたえる立場に立っている。トーマス・マンは、かくてハノオ・ブッデンブロークではなかった。彼はこのような出発点から、つぎの一步を踏み出して行くのである。

二 第一次大戦と『非政治的人間の省察』

前章で述べた時期以後、第一次世界大戦に至るまでのマンの作品の中で主要なものは、彼の唯一の戯曲『フィオレンツァ』（〇四）、カーチャ・プリングスハイムとの結婚（〇五）生活の最初の芸術的結実である『太公殿下』（〇九）、およびふたたび芸術家を主人公にした『ヴェニスに死す』（一一）であろう。この第三の短篇において、

マンは、厳格高貴な姿勢を保っている芸術家の中にもなおひそんでいる美的冒険への危険な要素を、そのテーマにふさわしい厳しい構成をもった独特な文体で描いてみせた。これはマンの誠実な芸術家としての仮借ない自己審判であつたといえるであろう。

一九一四年、第一次大戦が勃発した時、マンは『魔の山』の筆を進めていた。しかし、戦争による動乱と、これを機に生じた大きな精神的危機とのために、彼は一時その執筆を中止する。この年の十一月、彼は『戦時随想』と題した一文を雑誌『ノイエ・ルントシャウ』に発表した。このエッセイは、これまでに出了た彼の全集のどの版からも除かれていて入手できなかったが、最近フィツシャー文庫に再録されてふたたび日の目を見ることになったものである。

「文明と文化とは単に別物であるばかりでなく、対立物である。……文化は決して野蛮の反対物ではない。それはむしろ、様式をもった野蛮状態にはかならずしもしばしばある。……文化は神託を、魔術を、男色を、異端糾問を、宗教裁判を、舞踏病を、魔女裁判を、毒殺の横行を、色とりどりの残虐行為を包含するものである。しかし文明は理性である。啓蒙、馴致、教化、懷疑、分解である。——それは精神

である。然り、精神は文明的であり、市民的である。……」
 わずか十数ページのこの文章には、こうした激越な文句が
 つぎつぎと並んでいる。マンはこの時、大戦を西欧文明
 明に対するドイツ文化の戦いとしてとらえ、保守的なナ
 ショナリズムの立場から、ドイツ国民の覚醒を求めたの
 である。この一文に対して、スイスにあったロマン・ロ
 ランが批判の声をあげ、ドイツの知識人の狂気じみた好
 戦的発言の好例として、これを攻撃したことはよく知ら
 れている。ロランの非難は正当というほかに、またた
 とえマンの後の政治的見解の変化は考慮に入れないとし
 ても、この文章の文体そのもののさえ、あまりトーマス・
 マンにふさわしいものとはいえない。続いて同年に発表
 されたフリードリヒ大王の伝記的小論『フリードリヒと
 大同盟』の方は、戦争観などの点では『戦時随想』と同
 じ立場に立っているにしても、マン特有のアイロニーに
 あふれ、現在もその文学的価値を減じていないことを考
 えると、後年、マンがこの『戦時随想』を全集に収録さ
 せなかったこともっともである。

ところで、この一文のショーヴィニスト的な調子に反
 撥する声は、国境の彼方からのみあがったものではなかつ

た。それはトーマス・マンの兄、ともに作家であり、つ
 い昨日までは一緒にその青年時代をイタリアで送ってい
 たハインリヒ・マンから、もっともはげしい論難を浴び
 たのである。ハインリヒ・マンは、エミール・ゾラ論を
 発表して、この中でゾラの生涯に仮託してフランス第三
 共和制をたたえ、暗に、弟の主張を非難しながら、西欧
 的デモクラシーがドイツにも一日も早く実現することを
 願った。早くから進歩的な作家であった彼としては当然
 の主張であったが、トーマスには、これは大きな衝撃で
 あった。こうして第一次大戦を機に二人の間に激しい確
 執が生じ、一九二二年の初め頃、二人が「再発見」し合
 うまで続く。二人は共に高名な作家であったから、これ
 は当時のドイツでスキャンダルとして世を賑わしたのも
 当然だったろう。

さて、以上のことが直接のきっかけとなって、トーマ
 ス・マンは、大戦の四年間の大半を費して膨大な手記
 『非政治的人間の省察』(一八)を書くことになる。「震
 撼され、煽られ、声高に挑戦されて、わたしは動乱の中
 へ投げ込まれた。そして論争しつづ、わたしは『わたし
 のもの』を擁護したのだ」と書いているが、彼をこのよ

うに震撼したのは、大きくいえば第一次世界大戦であり、またもっと具体的には、彼がこの手記の中で「文明の文士」と名付けているタイプの人間、つまり民族的にも人間的にも芸術的にも、彼とは対蹠的なタイプの存在に彼が気付いたことであった。そしてこの「文明の文士」の原型が兄のハインリヒ・マンだったのである。この本の並外れた面白さは、トーマス・マンがこの中で、それ以前には無意識的な自明なものであった自分の芸術家としての存在の基盤を意識化し、再検討していることと、さらに右のような事情が全篇にその影を落しているところから来るものである。本書は一つのテーマに関するヴァリエーションズだ、とマンは序文の中で述べているが、この一つのテーマとは、マンが自分とは正反対の極にあると感じた「文明の文士」と対比し区別することによって、自己を確認し、認識することであったといえよう。その際彼が「わたしのもの」として擁護したのは、私見によれば二つの点に総括することができる。その一つは「ドイツ性」の問題である。この点に関していえば、マンの基本的立場は『戦時随想』の場合とほとんど変っていない。もっとも、彼の関心はドイツ帝国の

軍事的勝利にあったのではなく、もっぱら精神的存在としてのドイツ性の解明にあった。第二に、それはマンの芸術家としてのあり方の問題である。つまり、『非政治的人間の省察』は、トーマス・マンのドイツ論であり、また芸術論であるといえる。

マンは、自分が抱いているドイツ性のイメージを説明するために、数多くのドイツ人非ドイツ人を証人として引用する。しかし、一言にしていえば、そのドイツとはロマンティックのドイツである。しかし——この点が本書のもっとも微妙なところであり、またもっとも魅力のあるところなのだが——このいわゆるドイツ性を必死に擁護しているマン自身が、それはすでに過去のものの、失われたものであること、このようなドイツはむしろ「あこがれのドイツ」であることに気づいていたのである。また彼自身が内部にすくなく超ドイツ的な要素を持っていたのである。この膨大な手記を書き進める過程は、また同時にマンが自分の中にあるこの超ドイツ的要素をひとつひとつ確認して行く過程でもあった。

一方彼は、自分の芸術家としてのあり方の核心を形成する要素として、十九世紀、特にそのペシズムと、ド

イツ性と、さらにドイツ特有な市民的工匠氣質とをあげ、このような自分を支える「永遠に結ばれた精神の三連星」として、ショーペンハワー、ワグナー、ニーチェの三人を繰返し引用する。彼等三人は共に十九世紀を体现するものであると同時にドイツ性を代表するものでもあった。彼等は共に徹頭徹尾ドイツ的^{II}人間的存在であり、貴族主義的という意味で個人主義的であり、従ってまた非政治的であり、反民主主義的であった。『省察』を書き綴っていた頃のマンは、彼等三人の世界観に自分の立場をほとんど完全に重ね合わせていた。したがって、彼は、「新らしきパトス」つまり民主主義への情熱にかられて文学を政治と社会的改革とデモクラシーのプロパガンダのための手段にしようとする態度、つまり「文明の文士」氣質に対して、本能的に激しい発癢を感じた、というのである。

これに対してマンは、芸術とは唯一の見解を、それも芸術家自身の見解を一方的に主張するようなものではない、それは常に「畏敬と懷疑」とを兼ね備えたものでなければならない、と主張する。そもそも「真理とは語られうるものではなく、形象化されうるものではない。

ない。」だからこそ、ゲーテによって「形成^{ビルドゥン}」を教えられたドイツ人の許にあっては、芸術は、単なる意見や主張よりも高い評価を受けて来たのだ……。これはたしかに、芸術家マンの自己確認の言葉であろう。

すでに述べたように、マンはこの手記を書き進めているうちに、その世界観を徐々に発展させ、変化させて行く。みづから「非政治的人間」と名のり、自分は政治には無能である、つまり民主主義には向かない、と信じ、むしろ、政治に無能であることに固執したかったマンが、書くことによって自己を認識する行為を誠実に続けている間に、彼自身の本質の一部分、それも文学的部分によって、ドイツの民主主義への進歩に参与しているのだということを発見するに至るのである。後年、マンはこの手記を名付けて、「ドイツ的ロマン的市民性の最後の壮大な退却戦」と呼んでいるが、退却戦なるが故の矛盾に満ちた複雑な様相がこの書物の特色であると同時に、ルカーチの言葉でいえば、マンが「公衆の面前で」「有機的かつ漸進的に」その世界観を發展させて行ったその最大の実例であるという点で、この手記は比類のない魅力を持っているのである。「自己を確認した時、人

は現状のままに留まっていることはない」とマン自身は書いているとおり、この自己認識の書を書き上げた時、マンは、ドイツの保守的伝統的思考の姿勢や世界観を、すでに十分な距離をおいて眺められる立場にまで達していたのである。このような思想的展開を遂げたところで、彼は大战の終結を迎える。

三 『魔の山』まで

一九二二年、トーマス・マンは、『ドイツ共和国について』という講演をもって公衆の前に現われる。彼はこれの中で、保守的気分の強かった当時のドイツ国民に対し、特に青年層に対して、共和国の擁護を訴えようとしたのである。『戦時随想』、『フリードリヒと大同盟』、『非政治的人間の省察』を発表して、西欧的デモクラシーに反対し、ドイツ性を擁護した戦時中のマンにしては、これは驚くべき変身ぶりではないか——これが聴衆の一般的印象であった。だから講演の途中でも、彼の変節を非難して、聴衆が野次をとばし騒ぎ立てたことが記録されている。だが、マンはこれを受けて、「わたしは自分が（『非政治的人間の省察』の中で）書いたことを

何ひとつ撤回しません。……わたしは本当のことを書いたのですし、今も本当のことを言っているのです」と言い切っている。そして彼は、愛と死と夜を讃えたロマン派の詩人ノヴァーリスと、若々しいエネルギーに満ちたアメリカン・デモクラシーの詩人ホイットマンとを結びつけるという途方もない企てを敢行して、共和国制度がドイツの伝統的文化と、とりわけドイツロマン主義と「同じレベルを持ちうることを強調する。そして知識人や学生の間で不評だった新生の共和国を支持して、「まだ舌はうまく廻らないながら『共和国万才!』をとなえよう」と結ぶのである。この共和国擁護の講演は、その場の聴衆のみならず、多くの新聞雑誌からも、ごうごうたる非難を浴びたようである。

『省察』から『ドイツ共和国について』に至るトーマス・マンの思想ないし政治的見解の発展の経過には、断絶があるのだろうか。変化があるのだろうか。これをなれといふ切ることとはやはり無理のようである。それなら、そうした変化は、オポチュニスト的な時流への迎合だったのだろうか。この点だけは断じて否定することができる。それは、その後マンが一貫して行なった民主

義と反ファシズムの発言の数々が証明しているばかりではなく、すでに見たように、『省察』を「前向き」に読みとるならば、このような変化の内的必然性が、すでにこの本の中にもうかがえるからである。この壮大な退却戦には「勇気がなくもなかった」というマンの言葉を受けて、ルカーチは「この退却戦に民主主義への前進が続いているからこそ、ここには『勇気がなくもなかった』といえるのだ」と書いているが、これはまさに肯綮に当たるものである。しかし、逆に言えば、この省察の書によってマンがドイツの文化的伝統との深いつながりをもまず確認し、この自己認識をもって時代の問題との対決を始めたからこそ、後のマンの民主主義的な政治的発言や行動には真の勇気があったといえるのであり、彼の今日の意義もまさにこの点にあるのである。

いずれにせよ、『ドイツ共和国について』は、マンが民主主義の立場に立ったことを公然と確認した最初の宣言である。これと同時に書かれたエッセイ『ゲーテとトルストイ』(二三)にも、この間のマンの思想の微妙な発展ないし変化の跡をたどることができる。彼はこの中で、ゲーテとトルストイとを一方の極とし、シラーとド

ストエフスキーとを他方の極として、芸術や、また一般に人間と世界とに対する二つの態度を、両極とたわむれるような微妙きわまるアイロニーをもって追究している。そのアイロニーは、マン自身がはたしてどちら側にも身を置いているのか一元的には決め難いほど微妙である。しかし、たとえば人間において健康と病氣とのどちらがより高貴であるか、という問題についての彼の言葉には、今や浪漫派的な死への共感(これがマンの初期の作品に満ちていたことはすでに見た)からの離脱がはっきりと読みとれる。そこには早くも「ドイツのファシズムは民族的異教精神、ヴォータン崇拜である。……それは浪漫主義的野蠻である」という指摘が見られるし、「今日は、ドイツの偉大な人文主義的伝統を力強く強調し、厳かに養い護るべき時期である」として、ドイツの社会主義がドイツ精神とのつながりを見出すこと、「極言すれば、カール・マルクスにフリードリヒ・ヘルダーリンを読んでもらうこと」こそが、ドイツ社会主義が真に国民的使命を自覚するに至る道であり、ドイツの未来はこのことの成否にかかっている、という含蓄の多い言葉が書かれている。

『ドイツ共和国について』の講演が行なわれ、『ゲーテとトルストイ』が書かれた一九二二年という年は、マンが『魔の山』の執筆を続けていた時期だった。この作品は、一九一二年、当時執筆中だった『詐欺師フェリックス・クルルの告白』に挿入する短篇にするつもりで書き始めたものだった。しかし、上記の思想的転機を経て、量的のみならずその内容においても膨大なものにふくれあがり、当時マンが追求していた問題、すなわち人間の精神における生と死、健康と病気の問題、文明と文化、さらに西欧的人文主義的デモクラシーと東洋的専制の問題などが、壮大に執拗に追求されている。しかもそれは、いわば平凡なドイツ市民の代表的人物ともいえる「単純な」青年、ハンス・カストルプを間にはさんで、文明的民主主義的精神の代表者であるイタリア人ゼテムブリーニと、これに対立する一種の狂信的独裁的原理の信奉者であるユダヤ人のジェスィット、ナフタとの間で、果てしなく続けられる教育的論議の形で行なわれるのである。当時は、戦争と戦後の混乱によって、市民社会の行きずまりはいよいよその危機的様相を深め、フランス革命以来のヨーロッパ社会を支える原理であった西

欧的デモクラシーが、左の社会主義によって超克されるか、あるいは右のファシズムによって逆行的な破滅へと引きこまれていくかという大きな二者択一の問題が時代を被っていた。それは単なる政治の問題ではなく、危機に陥った市民社会の将来を決定すべき世界観の問題であった。『魔の山』においてマンが追求しているのは、まさにこのような時代の問題であり、この点で注目すべきことは、初期のマンの作品に支配的だった死への共感が今やはっきりと克服され、生への意志が明確に打ち出されている点である。マンが単純にゼテムブリーニを肯定し、ナフタを否定しているなどとはいえない。彼特有のアイロニカルな姿勢と語り口とは、彼にそのようなことを許さないのである。しかし、この時代の大きな二者択一の問題について、マンの決断はもはや疑う余地はないのである。

わたしは右に『魔の山』の思想的側面のみを取り上げたが、この作品の魅力はもちろんこれに尽きるものではない。たとえば口舌の徒二人の間の百の説法も一挙に吹きとばしてしまうような、生命力の権化の如きペーペルコルンという巨大な人物などもその一つであるし、また

一般に、当時はまだ長期の療養を要した結核患者の、療養所における肉体的精神的姿が、たとえば時間の觀念などを中心に驚くべくリアルに描出されている。一九二二年、入院中の夫人をたずねてダヴォスの療養所にわずか三週間滞在した経験に基づいてマンがこれを書いたということは——いまさらながら——驚嘆に価する。

四 亡命と戦争

一九二六年、リューベック市七百年祭に招かれたマンは、記念講演『精神的な生活形式としてのリューベック』で、自分の芸術家としてのあり方の本質を形成しているドイツ的市民性の問題をふたたびとりあげ、伝統と自分との結びつきを確認している。そして二九年、彼は『ブッデンブローク』の作者としてノーベル文学賞を受賞する。しかし、この頃すでに彼の祖国はますます危機的状況を深めて行く。この年アメリカに始った経済恐慌が、敗戦とヴェルサイユ体制の桎梏に苦しんでいたドイツ国民に恐るべき苦難として襲いかかり、そしてこのことがナチスの運動に力を与えることになった経過については、すでに周知のとおりである。この時期に、トーマ

ス・マンは、ますます決然とファシズムを批判し社会主義を支持する態度を強めて行く。一九三〇年に発表された『マリオと魔術師』では、イタリア人の催眠術師チッポラと、真に抵抗する術を知らぬままにその術策に陥って行く市民たちの姿をかりて、「ファシズムの心理学」を描いてみせた。ローマから来た紳士は「彼の戦闘体制が消極的であつたために敗北したのである。何かをやりたくない、ということだけでは、おそらく人間は生きていけないのである。……あることを意志しないということ、それももはや何の意志も持たず、従つて要求されたことはやってしまうこと、この二つの間にはほとんど紙一重の差しかないものであつて、この間にあつては、自由の理念などどうにも動きがとれなくなってしまうのだ。……」このマンの描写は、ナチスの「催眠術」の手中に陥つたドイツの市民たちへの予言的響きがあるといえるだろう。

一九三二年、ゲーテ死後百年祭にあたって、マンは『市民時代の代表者としてのゲーテ』および『作家としてのゲーテの生涯』という二つの講演を行なっている。『省察』の中でも、マンはゲーテをたびたび引用してい

るが、当時のマンにとっては、ゲーテ——ショーペンハーワー——ワグナー——ニーチェという系列は、ルカーチが指摘しているとおり、ドイツの文化的伝統を形成する基本線と感ぜられていたのである。そして、今やこの最後の三人がファシズムによって己のものとされた時、トーマス・マンは、ゲーテにはこの系列とは少し異った本質があることをより強く指摘し始める。ハンス・マイヤーは、トーマス・マンの生涯の世界観の発展を、ショーペンハーワー、ワグナー、ニーチェからゲーテへの道であったと指摘しているが、より正確にはゲーテの解釈替えの道であったともいえるであろう。たとえば第一の講演の中では、マンは、ゲーテの非政治的態度が結局は保守主義であったとしてこの点を否定的に扱い、それにもかかわらず彼の保守主義が決して偏狭なナシヨナリズムに堕さなかった点にむしろ注目すべきことを強調している。また第二の講演の中では、ゲーテのドイツ性との関わり方について述べ、ゲーテがそのデモニーッシュな側面を、つまりゲルマン的異教的野蛮を、彼の本性の中にあつたもう一方の面である地中海的古典的な要素、ヨーロッパ的要素によって馴致し洗練させたことを、ゲーテ

によるドイツ語の文体の洗練と関係づけながら述べている。それはゲーテの「民族教育的な意志」であつた、というのである。こうしたゲーテ観が、当時のナチス的ゲーテ解釈への批判をこめていたことは、いうまでもないであろう。マンのゲーテ解釈は、後にアメリカ亡命中に完成された長篇『ワイマールのロッテ』(三九)の中で一つの文学的形姿としてまとめられることになる。

一九三三年二月、マンは折からワグナー没後五十年を記念するための講演『リヒャルト・ワグナーの苦悩と偉大』を持って、ヨーロッパ各地に講演旅行に出る。そして彼の予定では数日の旅行のはずが、その留守中にヒットラーの政權掌握があり、はからずも十数年にわたる亡命生活の第一歩となるのである。亡命後のマンは、一九三五年、ヨーロッパ人の『理性への訴え』で、今日必要なのはまさに戦闘的ヒューマニズムであることを述べて、ファシズムの狂信的な原理と断乎として戦うべきことを主張したのを皮切りに、反ナチスの闘いを続けて行く。一九三六年には彼は市民権を剥奪され、続いてボン大学から名誉博士号を奪われる。この処置に対してマンが答えた書簡は、当時のマンの心境を痛切に表現した一

文である。この年は例のオリンピックの年であり、ヒットラーの全盛時代で、ナチスはその政策の成功を誇示し、世界中が幻惑されていた時期であったから、マンやその他の亡命文学者たちの努力した目標は、ファシズムの脅威について、その反文明的本質について世界の世論を啓蒙することにあった。スイスに住んで何度か大西洋を往復した後、マンは一九三八年アメリカに移住する。(市民権の取得は四四年)。彼は『来たるべきデモクラシーの勝利について』という講演をもって、アメリカ国内の各地をまわる。そして一九三九年、第二次世界大戦が勃発する。

戦時中のマンは、政治的な活動としては、BBC放送を通じてナチスの醜悪な正体を暴露し、ドイツ国民に対して、みずからの手で圧制者をたおすことを訴え続けた。一方、彼はこの間、一九二六年頃から書き始めていた『ヨゼフとその兄弟たち』(三三―四三)を書き進めていた。この大長篇小説は、旧約聖書の中の物語に題材をとったものであるが、この題材に関心を持つに至った経過と由来とを、マンは、一九三〇年に発表した『小自伝』の中ですでに語っている。すなわち、彼が神話に対して

抱く関心は「人間の問題」にほかならない、つまり、人間がどこから来てどこへ行くものなのか、という問題への関心が、また個別的特殊的なものでなく典型的なものへの関心が彼を神話の世界に向かわせたのだ、という。それは知性や科学を否定するための神話ではなく、むしろ心理学と結びついた神話、「神話的心理学による神話の心理学」の試みなのである。マンは、政治の世界では「人間性の敵」と戦いながら、彼の本来の領域である文学の領域では、永遠の人間性の奥深い世界を探っていたのである。

五 『ファウスト博士』

『ヨゼフとその兄弟たち』を完成したマンがつぎにとり組んだのは、彼の最後の長篇になる『ファウスト博士』(四七)である。この作品の成立過程を記録した『ファウスト博士の成立』(四九)の中でマン自身が書いているように、彼がこの作品の筆をとったのは一九四三年五月であった。一方この小説の副題は『一友人によって記された、ドイツ作曲家アドリアン・レーヴァーキューの生涯』となっており、この一友人である古典学者ツ

アイトブロームが主人公の伝記を書き始めるのもまた一九四三年五月という設定になっている。そして主人公の悲惨な運命の経過はヒットラードイツの崩壊と重なり合っただけで、折にふれて戦局の様子の描写が挿入されるなど、当時の時局への作者の関心は極めて濃厚である。自ら語っているように、この作品は「はなはだ危険で罪深い芸術家の生涯に仮託して、わたしの時代を描いた小説以外の何物でもない」のである。しかしマンは、この長篇の中で単に時局の問題を描いたのではない。『非政治的人間の省察』以来、マンが生涯をかけて考え尽くしたドイツ性の問題が、ここで今一度、徹底的に追求され形象化されているといつてよいであろう。マンは『省察』の中で、ドイツ文化の西欧文明への歩みを「音楽からデモクラシーへの進歩」という比喩でとらえた。この場合彼は、意識的には、音楽の立場に立ってデモクラシーを拒否しようとしたのである。また『魔の山』では、明智な「言葉の人」ゼテムブリーニに、音楽が「政治的にいかがわしい」ことを強調させ、さらにこの作品の結びでハンス・カストルプが口ずさむシューベルトの『菩提樹』について、この音楽が象徴する世界は、まさに死

の世界にはかならないことを指摘している。その彼が、今やこの極めてドイツ的な芸術領域である音楽、抽象的であると同時に神秘的でデモニッシュな芸術領域である音楽を天職とした芸術家を主人公に、長篇の筆をとったのである。何度か「芸術家小説」を書いたマンであった。何度か「現代における「芸術家の問題」がとり上げられていることは当然であるが、単にそれにとどまるものではない。「ファウストがドイツ人の魂を代表する人物であるなら、彼は音楽的でなければなりません」と、マンは一九四五年六月——『ファウスト博士』執筆の最中——ドイツの無条件降服の直後、ワシントンで行なった講演『ドイツとドイツ人』の中で述べている。ニーチエの生涯のエピソードをすくなくらずとり入れた主人公レーヴァーキューンの生涯を通じて、マンは、この長篇の中でまさにドイツの運命そのものをこそ描こうとしたに違いないのである。

敗戦後のドイツでは、マンの帰国を望む声もあがったが、一方では誤解に基づく反感や、また「内的亡命」に耐えたことを自称する人々のマンに対する悪意ある中傷も

またすくなくなかった。彼等によれば、マンのようにアメリカで安穩に暮らしていた亡命者連中には、ナチス治下にとどまってドイツ国民と苦難を共にした者とは違つて、ドイツの運命について語る資格はない、というのである。このような誤解や悪意の渦に巻きこまれるのを避けて、彼は戦後もなかなか祖国を訪れず、最初の帰国は、一九四九年、ゲーテ生誕二百年を記念した催しに参加した時のことであつた。七月二十五日、フランクフルトで彼が行なつた講演は、長い亡命生活の後で帰国した者の感慨が読む者の胸をうつ。そして東西に分割されたドイツの現状に対しては、わたしほどの占領地区を訪れたのでもなく、ドイツそのもの、ドイツ全体を訪れたのである、と述べている。「いかなる占領によつても侵されることのない自由なドイツ語をこそ真の故郷とする作家、何物にも従属することのない作家、このような作家を措いて、誰がドイツの統一を保証し、体現することができるでしょうか」と彼は語っている。事実、彼はこの時東ドイツをも訪れ、ワイマールでゲーテ賞を受けた。しかし、政治的世界の対立にとらわれない自由な彼の見解は、冷たい戦争と西側の世界における反共ヒステ

リーのの中では孤立したものになつて行く。そして一九五二年には遂にマッカーシー旋風を避けるためにアメリカを離れてスイスに移り、ここで生涯の最後の三年間を過ごすことになるのである。

すでに見たように、マンは、一九二〇年代から社会主義(この場合、彼の社会主義が、ソヴィエトや東欧における現実の共産主義とまったく同義であつたとはいえないが)をはっきりと支持していたし、すくなくとも共産主義とファシズムを同一視するような見解には一貫して反対であつたから、当時のアメリカは、かつてマンを暖く迎え入れたルーズベルト時代のアメリカとは違つて、マンにはその空気が息苦しく感じられたのも当然であるう。

この時期に、マンは『選ばれし人』(五一)と『欺かれた女』(五三)を完成し、また『詐欺師フェリックス・クルルの告白』を書き続けて、その『回想録第一部』を発表(五四)した。しかし、彼が生涯の最後まで書き続けたこのパロディ的告白録の類稀な魅力と問題性をしばらく措くとすれば、マンの最期をかざるにふさわしい作品は、やはり『ファウスト博士』であつたといつてよいで

あろう。

マンは、その長い生涯の間、ドイツ性の問題を、それも自分自分の問題性を通して考え続けた。彼はいわばドイツの問題性を徹底して生き抜いたのである。それは彼の生きた時代に二度の世界大戦をひき起したドイツであり、また世界史上にもほとんど類例を見ぬような、ナチズムという怪物を生み出したドイツである。大戦終了後二十数年を経た今日、ヒットラーとナチズムは過去のものとなり、一応片付いたかに見える。しかし、ナチズムを、一つの畸形的な結果として、ある意味で必然的に生み出した精神と文化とは、まだ決して片付いたわけではない。それは大きな危険性と、だが同時に大きな可能性とを内部にはらみながら生き続けている。だからこそ、一九四五年六月、『ドイツとドイツ人』と題する講演で、アメリカ人の聴衆に向かってつぎのように断言することができたトーマス・マンの生涯と作品とを深く知ること、は、現在もなお充分に新らしい今日的意義を持っているのである。

「悪しきドイツと良きドイツと二つのドイツがあるのではありません。ドイツは一つだけであり、その最良のものが悪魔

の奸策にかかって悪しきものになったのです。それは道を過った良きドイツ、不幸と罪と破滅の中にある良きドイツであります。ですから、罪を負った悪しきドイツをまったく否認して、『わたしは良きドイツ、高貴なるドイツ、正しきドイツです。悪しきドイツをわたしは諸君が絶滅するにまかせます』と宣言するのは、ドイツに生まれた人間にとってはまったく不可能なことです。わたしがドイツについて皆さんにお話しようとしたこと……は、どれひとつとして、よそよそしい、冷たい局外者の知識から生まれたものはなかったのです。わたしはそれをまた自分の中に持っていたのです。わたしはそれをすべてわれとわが身で体験したのです。」

〔追記〕「トーマス・マンへの誘い」とでもいうべき本論の趣旨から考えて、引用の出所を示すことはあえて避けた。また本論ではマンとドイツ性との関わりという主題に焦点をしばつたため、幾分一面的に単純化したきらいがあることを恐れる。マンの文学が持つ魅力は、決してこの面のみに尽きるものではないことを付言しておく。

彼の作品の全集、および本論で主として参考にした研究書はつぎのとおりである。彼の主要な文学作品はほとんどすべて邦訳があるが、エッセイや講演は、作品同様興味深いものであるにもかかわらず、未紹介のものが多し。

Thomas Mann: Gesamte Werke 12 Bde. 1960, S. Fischer Verl. Frankfurt/M.

Thomas Mann : Briefe 1889—1955 3 Bde. 1961—65, S. Fischer Verl.

Georg Lukacs : Thomas Mann 1957, Aufbau Verl. Berlin.

Hans Mayer : Thomas Mann. Werke und Entwicklung 1950, Volk und Welt Verl. Berlin.

Kurt Sontheimer : Thomas Mann und die Deutschen 1961, Nymphenburger Verl. München.

H. Bürger u. H. Mayer : Thomas Mann. Eine Chronik seines Lebens 1965, S. Fischer Verl. Frankfurt/M.

(一橋大学助教授)